

Title	<30周年記念論文・感想文> 意匠学会30周年を記念して
Author(s)	元井, 能
Citation	デザイン理論. 1988, 27, p. 8-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52714
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

意匠学会30周年を記念して

元 井 能

意匠学会が発足して30周年を迎える。初めからこの学会に関係していた者の一人として、感慨は一入である。その足跡をふり返って見る機会が与えられたと思うが、記憶力が至って悪く、忘れ去っていることが多いので恥しい次第であるが、思いつくままに記してみよう。

意匠学会は「デザイン」の学会である。それではデザイン学会とした方が適当でないかと思う人たちもあろう。しかし、この間の事情については、機関誌「デザインの理論」の第2号に、神戸大学名誉教授の向井正也氏が記しておられるので、今一度この文章を読み返していただきたい。新潮・世界美術辞典によれば、デザインの項中「意匠（計画という語に近い）」と記されており「美的・造形計画と同時に行為対象が内包する機能への考察が要求される」ともある。ついでながら、新村出の広辞苑をみると「下絵・素描・図案・意匠計画。生活に必要な製品を製作するにあたり、その材質・機能・技術および美的造形性などの諸要素と、生産・消費面からの各種の要求を検討・調整する総合的造形計画」とある。私の怠慢からか、手近な辞典類から、自らがかわわっている言葉を探してみることは今まで一度もしなかった。これも30周年のたまものと感謝する。ついでながら、今まで気がつかなかったことを述べてみよう。しかし、これは私だけのことであって、私の無知を発見したにすぎない事柄である

う。

「モダン・デザインの展開」——モリスからグロピウスまでは白石博三訳のニコラス・ペヴスナーの書である。同訳書のあとがきに「原著は、はじめ Pioneers of the Modern Movement from William Morris to Walter Gropius という表題が1936年にロンドンの Faber and Faber から出版され、名著の評を博したものだが、ここに訳したのは、それを13年後に改訂増補した第二版である」と訳している。このことは何を意味しているのであろうか。デザインという言葉は、すくなくとも、現在用いられている意味で、今世紀の初めから戦後まで、日本では語られることがほとんどなかった。ペヴスナーもまた、戦後、1949年にモダン・ムーヴメントを、モダン・デザインと書き直している次第である。

1953年「みずゑ」という美術雑誌の別冊第1号は「今日のフォルム」という特輯号で、その冒頭で、剣持勇の「現代デザインの成立」という記事がある。

「工芸」という言葉の時代は終わろうとしている。この古い、どうにも意味のとれない言葉に替って「デザイン」即ち「計画」なる概念がまます明確になって来る。

このような発言にしたがって、たしかにデザインという言葉は次第に一般化されることとなったが、これでわかるとおり、戦後、しかも1950年以降ということが指摘できる。

「現代デザインの成立」の文章はハーバート・リードの「インダストリアル・デザイン」に負うところが多いとしめくくっているが、リードの本邦訳の原典では Art and Industry が書名で、副題として The Principles of Industrial Design となり、みずゑ書房版では上記の書名とされている。そして、リードの初版は1932年であり、邦訳の原本は1953年版のものである。

1950年以降、わが国ではデザインという言葉が一般化しはじめ、それに拍車をかけたのが1960年の世界デザイン会議の日本での開催である。デザインの世界はかくして、デザイン・ブームをまきおこした。その後の石油ショックが

あったとしても、デザインの世界は確立されたのである。手もとに資料がないので明確には言いがたいが、ヨーロッパ各国では日本よりおそくデザインという言葉が定着したようである。デザインとは英語であり、英語圏では比較的早い誕生を見るが、自らの伝統を固守しがちなヨーロッパの国々にあつて、例えば、ドイツ・フランス・イタリアでも、今日ではデザインという言葉が用いられていることは衆知のとおりである。

デザインの領域で今一つ注目すべき事柄は、恐らくはインダストリアル・デザインに始まったと考えられるところから、建築・服飾・クラフト・コマーシャルとジャンルを広げてとどまるところなく、アーバン・デザインなどその広さはとどまるところを知らないほどである。したがって、デザインの本質的な問題、機能と装飾について、今一度根本的に見返る時期に来ているといえるのが今日であろう。